

# 海のまぼろし

小川未明

青空文庫



浜<sup>はま</sup>辺<sup>べ</sup>に立<sup>た</sup>つて、沖<sup>おき</sup>の方<sup>ほう</sup>を見<sup>み</sup>ながら、いつも口<sup>くち</sup>笛<sup>ふえ</sup>を吹<sup>ふ</sup>いている若<sup>わか</sup>者<sup>もの</sup>がいました。風<sup>かぜ</sup>

は、その音<sup>ね</sup>を消<sup>け</sup>し、青<sup>あお</sup>い、青<sup>あお</sup>い、ガラスのよう<sup>そら</sup>な空<sup>そら</sup>には、白<sup>しろ</sup>いかもめが飛<sup>と</sup>んでいました。

ここに、また二<sup>ふた</sup>人<sup>たり</sup>の娘<sup>むすめ</sup>があつて、一<sup>ひとり</sup>人<sup>むすめ</sup>の娘<sup>むすめ</sup>は、内<sup>うち</sup>気<sup>き</sup>で思<sup>おも</sup>つたことも、口<sup>くち</sup>に出<sup>だ</sup>していわず、

悲<sup>かな</sup>しいときも、目<sup>め</sup>にいっぱい涙<sup>なみだ</sup>をためて、うつむいてい<sup>い</sup>るとい<sup>い</sup>うふうでありましたから、

心<sup>こころ</sup>で慕<sup>した</sup>つていた若<sup>わか</sup>者<sup>もの</sup>のい<sup>い</sup>うことは、なんでもきいたのであります。

「その指<sup>ゆび</sup>にはめてい<sup>い</sup>る、指<sup>ゆび</sup>輪<sup>わ</sup>をくれない？」と、あるとき、若<sup>わか</sup>者<sup>もの</sup>がいました。

彼<sup>かの</sup>女<sup>じょ</sup>は、ほんとうに、若<sup>わか</sup>者<sup>もの</sup>が、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>を愛<sup>あい</sup>してい<sup>い</sup>るので、そ<sup>そ</sup>うい<sup>い</sup>つたのだらうと思<sup>おも</sup>つ

て、指<sup>ゆび</sup>にはめてい<sup>い</sup>る指<sup>ゆび</sup>輪<sup>わ</sup>をぬいてやりま<sup>し</sup>た。それは、死<sup>し</sup>んだお母<sup>かあ</sup>さんからもら<sup>ら</sup>つた、だ

い<sup>い</sup>じにしてい<sup>い</sup>たものです。

その後<sup>ご</sup>のこと、あるう<sup>う</sup>ららかな日<sup>ひ</sup>でした。

「こんど、遠<sup>と</sup>い<sup>い</sup>船<sup>ふな</sup>出<sup>で</sup>をして、帰<sup>かえ</sup>つてきたら、結<sup>け</sup>婚<sup>こん</sup>をし<sup>し</sup>ようと思<sup>おも</sup>つてい<sup>い</sup>るが、だ<sup>だ</sup>れか、約<sup>や</sup>

束<sup>くそく</sup>をして<sup>て</sup>くれる女<sup>おんな</sup>は<sup>な</sup>いだらうか。」と、若<sup>わか</sup>者<sup>もの</sup>が<sup>が</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>し</sup>た。彼<sup>かの</sup>女<sup>じょ</sup>は、も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>より驚<sup>おどろ</sup>

きま<sup>し</sup>た。そ<sup>そ</sup>して、恥<sup>は</sup>ずかし<sup>し</sup>さのた<sup>た</sup>めに、ほ<sup>ほ</sup>お<sup>お</sup>を赤<sup>あか</sup>くして、う<sup>う</sup>つむ<sup>む</sup>いて<sup>い</sup>たのであ<sup>あ</sup>ります。

彼<sup>かの</sup>女<sup>じょ</sup>にく<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>べて、友<sup>とも</sup>だ<sup>だ</sup>ちの娘<sup>むすめ</sup>は、平<sup>へい</sup>常<sup>じょう</sup>、は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>つ<sup>つ</sup>ぱ<sup>ぱ</sup>とい<sup>い</sup>わ<sup>わ</sup>れるほ<sup>ほ</sup>どの、快<sup>かい</sup>活<sup>かつ</sup>の性<sup>せい</sup>

質でありましたから、これをきくと、すぐに、

「私が、お約束をいたします。勇ましい、遠い船出から、あなたのお帰りなされる日を、氏神にご無事を祈つて、お待ちしています。」といいました。

こう女にいわれて、喜ばぬ男はなかつたでありましょう。若者は、大いにはしゃいで、このあいだもらつて、秘蔵していた指輪を、その娘に与え、指にはめてやりました。そばでこれを見たときは、いかに、おとなしい娘でも、さすがにそこにいたたまらず、胸を裂かれるような気持ちでしたのです。

遠い水平線は、黒く、黒く、うねりうねつて、見られました。空を血潮のように染めて、赤い夕日は、幾たびか、波の間に沈んだけれど、若者の船は、もどってきませんでした。はすつぱの娘は、はじめのうちこそ、その帰りを待ったけれど、生死がわからなくなると、はやくも、あきらめてしまいました。なぜなら、秋から、冬にかけて、すさまじい風が吹きつので、沖が暴れ狂つたからでした。彼女は、いつしか、他の青年を恋するようになりました。

「その指輪は、だれからもらつたのか。」と、その青年は、問うたのであります。いつか、約束にもらつた指輪は、いまはかえつて、邪魔となつたのでした。彼女は、顔を

赤くして、指輪をぬくと、海の中へ投げてしまいました。

「これで、いいのですか。」

かれらは朗らかに笑いました。内気の娘は、その後も、浜辺にきて、じつと沖の方をながめて、いまだに帰ってこない、若者の身の上を案じていました。しかし、何人も、彼女の苦しい胸のうちを知るものがなかったのです。北国の三月は、まだ雪や、あられが降って、雲行きが険しかったのであります。あわれな娘の兄は、こうした寒い日にも、生活のために、沖へ出て漁をしていました。ちらちらと、横なぐりに、雪は、波の上に落ちると、たちまち消えてしまいました。ふとそのとき、水の底に、茫として、怪しい影のようなものが見えたのであります。

「なんだろう？」と、彼が、瞳をこらすと、破れた帆を傾けて、一そうの、難破船が、水の中を走っていたのです。

「あ、船幽霊だ！」と、叫ぶと、ぎよつとしました。

「なんだか、気味が悪いし、もう引き上げよう。」といって、わずか二、三びきしか釣れなかったたらをかごにいれて、兄は、家へもどってきました。

たらの色は、黒々として、大きな目玉が光っていました。娘は、その一びきを晩のさ

かなにしようとお庖丁をいれました。魚の肉は、雪よりも白く、冷たかったです。そして、腹を割ると、真っ赤な、桃のつぼみが出たと思いました。

「どこで、桃のつぼみを、のんだのだろう。」といって、娘は、つまみ上げてから、「まあ！」と、目をみはったまま、ふるえ出したのです。それは、永久になくしてしまつたと思つていた、お母さんの形見の指輪でありました。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「海《うみ》のまぼろし」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 海のまぼろし

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>